

# 小川未明文学館 館報

第六号

小川未明文学館

vol. 6



小川未明文学館

新潟県上越市本城町八一三〇(高田図書館内)

TEL 025-1523-11083

FAX 025-1523-11086



## 「赤い蠟燭と人魚」の舞台

未明の代表作「赤い蠟燭と人魚」。その舞台は「北方の海」とあり、具体的な地名は書かれていません。しかし海の様子から、未明が遠く波の音を聞きながら育った日本海、直江津の海であろうことは想像に難くありません。

日本海を臨む船見公園には人魚の像が佇み、いわさきちひろの遺作『赤い蠟燭と人魚』は、直江津の郷津海岸をモデルに描かれています。

## 目次

### 小川未明文学館 館報 第六号

二〇一二年五月三十一日発行(年刊)

#### 【寄稿】

小川英晴

「創作フラメンコ」赤いろそくと人魚」に寄せて」

2

#### 【報告】

文学館一年の記録(平成二十三年度)

5

平成二十三年度特別展

「装幀挿画で楽しむ未明童話の世界」

7

文学館講座

8

生誕百三十年記念展「小川未明—雲のごとく—」

10

#### 【小川未明文学賞】

13

【ボランティアネットワークだより】

「のぼら vol.8」

14

【文学館からのお知らせ】

16

## 創作フラメンコ 「赤いろうそくと人魚」に寄せて

小川 英晴  
(詩人)



はやいもので、昨年は未明の没後五十年、そして今年には未明生誕百三十年を迎えた。思えば私が十三歳の時まで祖父の家にはよく遊びに行ったが、文学上の話もなければ学校での話もしたことがなかった。祖父の話す言葉は早口で聞きとりにくく、話しかけられることに困惑したことがたびたびある。それでも必死に何かを幼い私に伝えようとしていたことだけは、今も記憶の底に残っている。未明の家に遊びに行くと時々坪田譲治先生の奥様と出会った。大きなモモや大きな蜜柑を祖父へのおみやげに持って来て下さったのだ。おすそ分けして頂いたモモはとても美味しかった。庭にはひょうたん

形の池があり、大きな蛙が一匹、池の主として住んでいた。半分水面から顔を出し、微動だにしない姿にはどこか不思議な威厳があった。祖父は庭の手入れと愛してやまぬランの手入れを老いた妻と息子夫婦にまかせていたが、ランが花ひらいた日の香りと言ったら、それは見事なものだった。まず玄関先をくぐった時から香りのよい匂いがしてくる。こんな美しい香りを嗅いだことのない私は幼心に言い知れぬときめきを感じたものだ。

いま、書齋を整理していて、どこかで拾った河原の石や土器のかけらを大切に持っていたことが偲ばれる。そこは古い手鏡や須恵器や朝鮮、中国の壺などがあり、これらの品々を手元に置きながら、ひとり静かにいにしへの光景を空想していた祖父のことが思い浮かぶ。幾千年前の桃源郷への夢が祖父に童話を書かせたのであろう。未明童話を読んでいると、それはいつしか人間対自然の物語であることに気がつく。卑小な人間が己の枠を超えて自然への挑戦を果たし、そして敗れ、この地上から消え去る。この命題に対して、「人間よ、心して自然と向き合い、この地上のすべての生命を慈しめ」と言っているかのようなのである。生誕百三十年を記念しての文学館での展示は、そんな未明のこまやかな一面にまで光をあてた魅力的なものとなった。これで未明の創作の背景がより明確になったように思う。

今年の四月三十日、「小川未明・愛の世界」を上越文化会館の主催で行った。その公演を私はぜひとも鍵田真由美と佐藤浩希の創作フラメンコによって実現したいと提案した。演目はもちろん未明の代表作「赤いろうそくと人魚」である。

小川未明の世界については、現在も多くの批判にさらされている。作品がネガティブであるとか、表現が古いとか、はたまた子供が理解できる世界ではないとか、そしてわくわくドキドキする物語がないとか……。おそらく未明が言いたかったのは、ただ一つ、自然に対する人間の驕り高ぶった生き方への警鐘にあったのではないだろうか。それが時に社会に向けられ、またある時にそれが文明批評となつて表われた。

今回、私が「赤いろうそくと人魚」を創作フラメンコとして鍵田、佐藤両氏に依頼した折、大自然の織りなす物語のなかで、人間は本当に小さな存在に過ぎず、それゆえにこそ互いに愛しあい、分かちあい、弱き者を助けなければならないということを強調してほしいと言った。文学においては表現力はなにより重要だが、それにもまして真摯さが重要となる。つまり作家としての生き方が最後には問われるのだ。未明に限らず、日本の童話作家の多くは信仰と深い慈愛の眼差しをもって童話を書いてきた。真・善・美、それに深い信仰があったのだ。現代の童話に美への深い愛着は見られない。また大自然への畏敬の念も見られない。現代文明の恩恵を心ゆくまで凝縮している現代人にとって、テレビで見られる飢饉や貧困、それに天変地異はまったくの他人事だったのだ。それが今回の大地震と津波、それに原発事故によって、他人事ではなくなり、危機意識を誰もが共有するようになった。

未明は大正の始めに、すでに現代文明の行く末を案じて「眠い町」を書いたが、これを書いたのは文明社会の持つ歪みをいち早く見抜いていたからに他ならない。それゆえ私は、フラメンコによってし

か実現し得ぬ究極の世界を、鍵田・佐藤の手によって現実のものとして欲しいという願いが強くあった。まずはじめに五つの場面に分けた。ある意味、単純でおそろしい物語の恐ろしさを、よりリアルに表現したいという私の願望を二人はよく理解し、作品化してくれたように思う。これは今まで本格的なフラメンコを上演したことのない上越文化会館にとっても大きな冒険だったが、鍵田・佐藤の多大な努力と情熱によってみごとな作品に仕上がった。もちろん、ここには人魚の娘を演じた工藤朋子、香具師を演じた矢野吉峰、それに全体を通して「赤いろうそくと人魚」にふさわしい音楽を作り上げた中島千絵等の渾身の仕事があったことを忘れてはならない。



舞踊団に招かれ初めての打ち合わせをした折、私は加藤登紀子による「赤いろうそくと人魚」の朗読CDを皆と一緒に聞き入った。そして今回、この作品を上演するにあたって重要なことをいくつか述べた。まず第一に、これは自然対人間の物語であるということ。そして今回の大地震や原発事故に通底する物語であるということ。第二に、舞踊と音楽がこの物語を説明しながら展開するのではなく、今まさに起こりつつある物語として一瞬一瞬を生きたことが重要であること。そして第三に、舞台に立っている人だけでなく、すべての参加者が演じる人と心をつなぐ、集中してひとつの精神的高めへと至ること、などである。妥協を一切ゆるさず、説明的表現も認めず、ただひたすら無私の境地に至れるように、それぞれがそれぞれの方法で集中力を高めていった。そしてすべての想いを人魚の娘から人魚の母へと手渡した時、舞台は最高潮に達したのだった。この公演で私は最後に受ける拍手はいらぬと言った。むしろ、皆が沈黙し、そこから人間というもの存在を心底考えてくれる、皆がいいと言った。結果は五分間をこえるスタンディングオベーションを受けたが、私は舞台の上で感動を共有しながらも少しばかり困惑していた。鍵田真由美、佐藤浩希は私の詩人としての経験上から見ても、まれに見る天才であることに間違いはない。そして、今回、無心の努力が報われたようにも思う。しかし、より高い知見にたてば、未だ解決すべき問題点があり、さらなる高みを目指す要素もある。かように芸術の道は果てしなく長く遠いのだ。

その途上であって、私は鍵田真由美、佐藤浩希、末木三四郎、工

藤朋子、中島千絵に言い続けてきたことがある。それは、孔子の「知るは好むに及ばず、好むは楽しむに及ばず」という言葉である。この言葉に導かれ、皆は毎夜議論をし尽くし、楽しく語りあった。普段ではなかなか言えないことも美酒に許されうまく相互に言いあえたように思う。そして、上越での公演を成功させ、「もっとうまい酒を飲もう」を合言葉に作品作りに励んだのだ。上越文化会館の援助も私たちの仕事に勇気を与えた。いい作品は皆で作って皆で喜びを分かちあうことが望ましい。演じることを通して人の心から心へと感動と喜びが受け継がれてゆく。これをして人生の醍醐味と言わずして何があるだろう。

その他に、詩のボクシングで谷川俊太郎と対戦したねじめ正一には彼の代表作「かあさんになったあーちゃん」を読んでもらい、「笑っていいとも」で三年半にわたり川柳コーナーの選者を担当したやすみりえには未明の詩と童謡を。そして心に沁みるギターを奏でたら右に出る人はいない佐藤達男には自選の二曲を、そしてこの十年上越市の小学生に「赤いろうそくと人魚」を朗読してきた橘由貴には今回は「野ばら」と「月夜とめがね」の朗読をお願いした。そして堀越千秋にはフラメンコの歌にとどまらず、三枚の巨大な背景となるべき作品を無償でお貸しいただいた。こうして皆の協力によって今回のすばらしい公演ができたのだ。縁があれば、今一度この「赤いろうそくと人魚」を上越の人々に再演できればと願っている。



## 文学館一年の記録

### 朗読研修会

7月5日・12日・26日  
参加者 34名

橘由貴さん（ヴォイスアーティスト・朗読療法士）を講師に、朗読研究会「心に届く語りかけ」を開催しました。研修会では、声と発声の基礎から魅力的なことばの表現方法までを学び、未明童話「大きな蟹」「小さな草と太陽」で実践的な朗読を行いました。



朗読研修会

### 特別展

#### 装幀挿画で楽しむ未明童話の世界

10月1日～11月6日  
来館者 4047名

明治・大正・昭和にわたって生み出された未明童話には、その時代にマッチした挿絵がつけられ、子どもたちの心を惹きつけてきました。本展では、童画家たちによる挿絵、画家や装幀家たちによる装幀を通じて、子どものからしを彩ってきた未明童話をご紹介します。会期中、特別展朗読会、手づくり絵本のワークショップなどのイベントを行いました。（詳しくは特別展報告の頁をご覧ください）



特別展

### 特別展朗読会

10月2日  
参加者 30名

未明ボランティアネットワークの4つの会が合同で朗読会を開催しました。未明童話「島の暮れ方の話」「子うさぎとははうさぎ」「赤い船」「どこかに生きながら」を、映像や音楽、ペープサートなどを交えながら発表しました。



特別展朗読会



### 手づくり絵本のワークショップ

10月8日  
参加者 27名

手づくり絵本 木いちごの会にご協力いただき、未明童話「ハーモニカをふくと」を題材に、仕掛け絵本を作るワークショップを開催しました。はじめに朗読を聞き、参加者がイメージをふくらませた後、色がみやモール、スパンコールなどを使って、個性あふれるオリジナル絵本を作りました。



手づくり絵本のワークショップ



## 童話創作講座

10月15日・11月23日（入門コース）  
10月22日（実践コース）

参加者 14名

上越市在住の児童文学作家 杉みき子さんを講師に、入門コースと実践コースに分かれて短篇童話の書き方について学びました。入門コースでは、まず講義を受け、その後書いた作品の講評を受けました。受講者の皆さんの作品は、「童話創作講座受講者作品集」として、文学館の図書コーナーや図書館で読むことができます。



入門コース



実践コース

## 文学館講座

10月16日・29日・11月6日

参加者 各回30名

未明や特別展にちなんだ3回の講座を開催しました。講師は、第二回宮川健郎さん、第二回広松由希子さん、第三回小笠裕二さん。（詳しくは文学館講座の記録の頁をご覧ください）

### 小川未明作品朗読鑑賞会

#### 「童話のふるさと・未明の世界へ」

9月15日・16日

市内の小学6年生を対象に、市民ボランティアグループによる未明童話「赤い蠟燭と人魚」（小川未明の世界）、「二度と通らない旅人」（未明ボランティアネットワーク）の朗読鑑賞会を開催しました。53校2113名の生徒が参加しました。

### 第20回 小川未明文学賞贈呈式

3月17日

「小川未明の文学精神を次の世代に継承し、子どもたちの心に夢と希望を育む」ことを目的に平成4年から募集している第20回小川未明文学賞の贈呈式を文学館で開催。大賞はもりいずみさんの「パンプキンロード」、優秀賞は山中真理子さんの「けやき」、大澤桃代さんの「アユミといっしょに」でした。文学賞の頁で、大賞のもりいずみさんの「受賞のひとこと」を紹介しています。

## 文学館おはなし会

毎月第2・第4日曜日

未明童話の魅力を伝えるため、未明ボランティアネットワークの協力で、月2回のおはなし会を開催しています。23年度は23回、271人の皆さんに楽しんでいただきました。



文学館おはなし会

## 出張おはなし会

未明作品に出会う機会をより多くの方に提供するため、未明ボランティアネットワークの協力で、出張おはなし会を開催しています。学校や福祉施設など、23年度は39カ所（1627人）を訪れました。

## 生誕百三十年記念展

### 小川未明―雲のごとく―

3月18日～5月5日

来館者 5750名

1882（明治15）年生まれの小川未明は、今年生誕130年を迎えました。生涯で1200編以上もの童話を生み出し、その作品は没後50年を経た今も多くの人の心をとらえています。本展では自筆原稿や遺品、初版本等を通じて、未明の作品と生涯をご紹介します。（詳しくは記念展報告の頁をご覧ください）



生誕130年記念展

装幀挿画で楽しむ未明童話の世界

△開期▽

10月1日(土)～11月6日(日)

未明童話の装幀や挿画には、童画家のみならず、日本画や洋画の世界で活躍した画家も絵筆をふるいました。画家たちはそれぞれの感性と画風で未明童話と融合し、独特の世界を作り上げました。本展では、未明の作品世界を照らすこれらの絵に注目し、主に当館所蔵資料の雑誌・図書の中から、目で見て楽しめるものを中心にご覧いただきました。



展示内容

未明童話の初出雑誌、装幀の美しい図書を、画家のプロフィールなども交えながら紹介しました。また、代表作「赤い蠟燭と人魚」「月夜と眼鏡」を描いた挿画を集めたコーナーや、未明と数多くコンビを組んだ童画家(川上四郎、武井武雄、初山滋、茂田井武、小川哲郎)の作品を紹介したコーナーなどを設け、計130点余の資料を展示しました。その一部をご紹介します。



『みどり色の時計』茂田井武/画  
昭和25年4月 新子供社



『よっぱらい星』小川哲郎/画  
昭和23年11月 人文書房

◆未明童話のはじまり

未明童話の最初の一步は、未明24歳のときに踏み出されました。早稲田文学社に入社し、島村抱月の指導のもと雑誌

『少年文庫』を編集。この頃まだ無名だった竹久夢二が絵画担当に起用されました。未明自身も童話や童謡を数編書き、夢二の挿画がつけられています。

『赤い船』は未明の5冊目の著作にして、初めての童話集です。日本の近代童話の先駆的作品となりました。表紙では「赤い船」で語られる外国への少女の憧憬が表されています。



『赤い船』渡辺ヨヘイ/画  
京文堂書店 明治43年12月

◆児童雑誌

大正時代、鈴木三重吉が発行した『赤い鳥』をきっかけに、子どものための雑誌文化が大きく花開きます。その代表的雑誌の多くに未明は作品を寄せました。

『おとぎの世界』

1919年(大正8)4月～1922年(大正11)10月 『赤い鳥』に触発されて生み出された雑誌のひとつで、創刊当初未明が監修をつとめました。編集は井上猛一(のちに新内の第一人者となる岡本文弥)。初山滋が表紙や口絵、挿画の一切を描いています。初山はデビュー間もない22歳でしたが、この仕事で名を知られるようになりました。

『コドモノクニ』

1922年(大正11)1月～1944年(昭和19)3月 幼児・低学年を対象とする芸術的絵雑誌。当時、『赤い鳥』の清水良雄、『おとぎの世界』の初山滋、『童話』の川上四郎と、その雑誌専属のようになっていた画家たちがその垣根を越えて一堂に会し、誌面を彩りました。当時、子どもはひらがなより先にカタカナを学んだため、未明の童話もカタカナで書かれています。



『コドモノクニ』  
第12巻第6号  
武井武雄/表紙  
東京社 昭和8年5月

『お話の木』

1937年(昭和12)5月～1938年(昭和13)7月 未明が55歳のときに主宰し、奈街三郎・柴野民三が編集した児童雑誌。これを主宰するにあたって未明は、芸術としての童話こそ児童の明朗なる人間性を養うことを説いています。前年に鈴木三重吉の死去により終刊した『赤い鳥』や、『童話』のような雑誌を目指していました。



『お話の木』創刊号  
武井武雄/表紙  
子供研究社 昭和12年5月

\*印の写真提供：小川家



## 文学館講座

平成23年度の文学館講座は、特別展や未明没後50年にちなんだ3回の講座を開催しました。ここでは講座内容の一部をご紹介します。

## 第一回

## 「日本の児童出版美術の流れと小川未明」

10月16日（日） 宮川健郎氏

（武蔵野大学教授）



子ども時代大切に読んだ本の記憶というのが皆さんそれぞれにあると思います。内容は詳しく覚えていなくても、それがどんな大きさでどんな重さだったか、そういった記憶と共に子どもの本のことがよみがえってくる。今日はそういう「モノ」としての子どもの本にかかわる話になっていくと思います。私も子どもの本の研究をしてきましたが、どういう内容で何を語っているのか、つまりテクストについて考えてきたわけです。その一方で、子どもの本の、モノとしての面ということも大事なものだと思っています。具体的には装丁や挿絵ということになると思いますが、それについてまとめた研究をしたのは、翻訳家としても有名な瀬田貞二さん、上笙一郎さん、鳥越信さんです。今日の話は「児童出版美術」という言葉も含めて、上さんの考え方が下敷きになっています。

一般の文学と違って、テクストを本として子どもに渡そうとするときに、子どもの理解を得るために、あるいは親しみやすくするために様々な絵を入れて本を作っていくことがあります。一般の文学書でも装丁が大事ですが、装丁だけではなくて挿絵が入っているということが子どもの本を大きく特徴付ける要素になっています。童話や児童文学と絵本は違います。言葉に多少手助けされながら絵がいろんなことを語ってくれる、なおかつ本の形態になっていくのが絵本の特徴です。幼い子どものための児童文学はたくさん絵が入っているので絵本と混同されがちですが、絵を仮に全部外してしまっ

ても成立するのが児童文学です。どちらも子どもにとっては大切なものですが、児童文学の本と絵本は違う、挿絵と絵本の絵は違うというふうに考えていただけだと思います。

子どものためということを意識して出た本は、明治24年の巖谷小波の『こがね丸』が最初だとよく言われます。挿絵を描いたのは武内桂舟ですが、いわゆる大和絵、日本画です。これが徐々に、西洋画を学んだ人が子どもの本の世界に入ってくるというかたちで大正に変わってきます。「童画」の時代です。その少し前に「子ども絵」という時代があり、竹久夢二、未明の『赤い船』の挿絵を描いた渡辺与平らがその代表です。大正期に入ると童話、童謡、そして童画という言葉が使われるようになりますが、ただ言葉が変わったのではなくて、中身や中身に対する考え方が変わったのだと思います。明治期の子どもの文学というのは、富国強兵を実現するために子どもをちゃんと育てなければならぬという子ども観から成っています。それが大正に入ると、子どもは非常に純粹無垢な存在であるという、のちに童心主義といわれる考え方が盛んになり、その子どもに届ける、あるいはそういった理想的な子どもを描き出すというのが童話であり童謡であり童画である、と変わってきます。その新しい時代を作ったのが『赤い鳥』です。その後次々と子どもの雑誌が生まれ、それぞれ専属の画家がいました。『赤い鳥』には清水良雄、未明が編集にかかわった『おとぎの世界』には初山滋、『金の船』『金の星』には岡本帰一、『童話』には川上四郎。これらは読

み物の雑誌です。ところがやがて絵を中心とした『コドモノクニ』という絵雑誌が少し遅れて現れます。これにはそれぞれの雑誌に専属に描いていた画家たちがこぞって参加しました。特に活躍した人は武井武雄です。昭和に入ると『少年倶楽部』や『少女倶楽部』などの大衆的な児童雑誌が出るようになって絵もガラッと変わります。少年雑誌には密描挿絵といわれる、かなり細かい描写が特色の非常にリアルな絵。少女雑誌には抒情画といわれる絵がたくさん出てきます。また、童心主義を批判するプロレタリア児童文学といったものも台頭してきました。

これらの流れと小川未明がどんなふうにかかわっていたかということをお話します。渡辺与平装丁挿絵の『赤い船』。素朴で、でもモダンな面白い絵で、この本は大変しゃれた良い本になっています。本場に近代的な児童文学は『赤い船』からだという意見があります。挿絵の面から見ても『こがね丸』とは相当近代性が違いますし、この説もなんとなく頷けるような気がしています。

初山滋はたくさん未明作品の挿絵を描いた童画家です。ですからある種コンピのように私たちは意識していますが、初山自身は晩年に、精一杯描いたからもう完結した仕事なのにさらに繰り返してしまったことが自分としては問題だった、というふうに言っています。大変考えさせられる問題です。子どもの文学はテクストだけではなくて、挿絵や表紙絵を伴って本にするというのが必要なことでもあるわけです。だからいろいろな画



家が小川未明と組んで仕事をした。特に初山滋は未明童話のイメージを映像として定着するのに大変力のあった人で、未明童話の世界と初山の世界は大変似合っている。私も思います。しかしそのことが初山をどこかで息苦しくさせてしまったということもあるようです。未明童話も含めて、元々完結しているテクストを絵本にする場合は、テクストを見開きに納めていくためにどこで切るか、そこはどういう絵を配置していくかということ、絵本にかなり近づけていく努力が行なわれています。しかし完結しているテクストをあえて絵本に再構成するというのはどこか無理もあるし、ある種のおもしろさが生まれる場にもなる。本来の絵本とは違う、やはりテクストの「絵本化」なんです。ですから、絵本なんだけれど童話の挿絵である性格も合わせて残ってしまう。では挿絵とは何かということを考えてみると、ストーリーの中で強調すべきだと画家が考えたところを、特に絵として描き出しているのが挿絵です。絵に変えて物語の一部を引用するのが挿絵の仕事だと思います。そこには画家たちの作品解釈が非常に具体的に表れます。だからどこが絵になっているのかを見るのは大変楽しい。未明童話の絵本は「絵本化」なので、絵本になったものは画家による未明童話の解釈の姿なんです。画家が童話をどんなふうに見たのか、具体的に表れてくる場として見ると大変おもしろいと思いますし、同じ作品をいろいろな人が描いてくれば、例えば「赤い蠟燭と人魚」を若い画家が絵本にしてくれればいいと思います。

## 第二回

「描かれた未明の世界」 茂田井武・いわさきちひろ・酒井駒子など

10月29日(土) 広松由希子氏  
(絵本研究家、元ちひろ美術館・東京学芸部長)

第二回目は、特別展開催中の市民ギャラリーを会場に、未明童話の挿画に囲まれながら公開講座で行いました。講師の広松さんは、図書や写真資料を多用し、童画から絵本への流れや、未明童話を描いた画家たちの仕事についてお話くださいました。

◆茂田井武の挿画について、「場面の切り出し方」「モノクロームと構図の妙、独特の遠近法」「子どもに語りかける物語性と詩情」に注目しながら、その魅力を解説。

◆いわさきちひろの『赤い蠟燭と人魚』は、亡くなる2年前に病をおして直江津を訪れ、海岸をスケッチしたものを、亡くなってから構成して作った未完の遺作。ちひろはこの人魚の少女を描くときに、自分を重ねたり、将来への不安を抱えていたりして、かなり人魚に思い入れがあったと思います。この話の持つ深い部分を見つめながら描かずにはいられなかったでしょう。

◆描かれる未明 文と絵の関係：2000年代に入って架空社から出版されている小川未明の絵本シリーズ。これは画家たちがかなり自分に引きつけて、新解釈で今の人たちに向けて描いています。絵本には読者に想像の余地を与える隙間があるといいで、未明の「具体的に書かない、あいまいにする」というところがある文章は、これから新しい絵本のあり方を探すときにいろいろな可能性があるのでないかと思えます。



## 第三回 「未明童話の新しい扉をひらく」

11月6日(日) 小笠原三氏  
(上越教育大学教授)

第三回目は、これまでの未明童話の研究の歩みと、講師の小笠原さんが刊行準備を進めている新しい児童書集などについてお話いただきました。

◆未明の童話や小説を読み進めていこうとするときに、問題となる事柄があります。「文庫本などの児童書が少ない」「入手できる文庫本等は類型的」「講談社刊『定本小川未明童話全集』全16巻に未収録童話が多い」「児童書の書誌的な情報が不十分」「解説書や研究書の資料が不足している」といったことです。これらの問題を改善・解消していくことが、未明童話を広く読んでもらうために必要な条件となつてきます。今後の課題として、次の三点をあげます。

①初出誌調査と全集未収録童話の収集：電子ファイルによる書誌情報の提供。初出誌・紙情報や童話集の収録状況、童話

の短いあらすじ、全集未収録作品の画像ファイルなどを収録したものを提供する。

②解説書・研究書の刊行：未明の童話集の解説をはじめ、小説や評伝を解説した本が必要。書誌や解説書の整備が進めば、次に研究書類の刊行が望まれる。

③新しい児童書集の編集・刊行：有名な未明童話は大正期に書かれたものが多いが、昭和期の童話にも優れた童話が多い。とりわけ童話作家宣言直後の昭和初年代の未明童話に注目し、それらの中から、未明童話の新しい魅力を伝える童話を選び紹介する。

◆みんなで未明：「出前朗読会」読み聞かせ日本一の市へ」「未明童話トライアスロン」「未明童話作文・童画コンクール」「文学館ワークショップや月替わり面白展示、ホームページの充実」といった活動を皆さんと一緒にやっていくことを通じ、多くの人たちに未明童話の世界に触れていっていただきたいと思えます。



生誕百二十年記念展

小川未明 ―雲のごとく―

△開期▽

3月18日(日)～5月5日(土・祝)

童話作家小川未明が上越高田に生を受けてから、今年で130年を迎えました。18歳で東京に出て作家の道を志し、ふたたびふるさとに住むことのなかった未明でしたが、北国上越の厳しくもゆたかな自然の風物は、童話はもちろんのこと、小説、随筆など数々の作品のそここに息づいています。

未明はやがて独自の作風で小説家として文壇で名をあげますが、のちに童話にこそ自らの天分があると思ひ定め、その道に専心します。50年の作家人生で世に送り出した童話は、1200編を超えました。未明が亡くなってから50年の歳月が流れましたが、今なお読み継がれる未明の作品は、世代を超えて愛され続けています。

「雲の如く高く、くものごとくかがやき雲のごとくとらわれず」は、未明が終生持ちつづけた、美しいもの、はるかなものに対する憧れの感情がよく表されている代表的な詩です。本展では、まさにこの詩のような理想を持って生きた未明の生涯の歩みを、当時の写真、自筆の原稿や書簡、書籍などを通してご覧いただきました。



■展示内容

I 北国のロマンチシスト

小川未明(本名健作)は明治15年4月7日、新潟県中頸城郡高城村五分一(現上越市幸町)に、父澄晴・母チヨの長男として生まれました。小川家は高田藩榊原家の家臣の家系です。この家には代々子どもが育たないというので、生後すぐに隣のろうそく造りの家に預けられ、3歳頃までを過ごしました。

明治21年に尋常科岡島小学校(現大手町小学校)に入学。直感が鋭く感受性の強い未明は、正當に理解されないとかんしゃくを起こし、教師や友達と衝突することもありました。

父澄晴は、郷土の戦国武将上杉謙信を崇拜し、謙信の居城だった春日山城跡に謙信を祭る神社の創設を發願。そのため準備に東奔西走し、家を空けがちでした。12歳のときに神社創設の許可が下り、未明は母の使いで何度も高田と神社建設中の春日山を往復することになります。未明の心に越後の自然や風物が深く浸み込んだのはこの時でした。また、母は厳格で折り目正しい性格だったため、未明は優しい祖母に甘えました。祖母から聞いた昔話や伝説、心に浸み込んだふるさとの自然は、生涯にわたって未明文学の土壌となりました。

明治28年、中頸城郡尋常中学校(その後高田中学校、現高田高等学校)に入学。中学では文芸部で同人誌を出したり、中央の雑誌に漢詩などを投稿したり、文芸活動をさかに行います。文学や考古学に興味を持ち、それらには熱心に取り組む反面、数学が不得意で落第を

繰り返した未明は、上京を決意しました。19歳の春のことです。



\*父澄晴に抱かれて



中学時代に投稿した雑誌『中学世界』博文館

II 憧憬の児

上京した未明は、明治34年4月、東京専門学校(現早稲田大学)の英文哲学科に入学します。イギリス浪漫派の詩やロシア文学に親しみ、大学では坪内逍遙、島村抱月、ラフカディオ・ハーンの講義に接し影響を受けています。また、ある課題の答案がきっかけで逍遙に師事するようになった未明は、やがて創作を志し、作品の添削を受けるようになります。明治37年、逍遙の紹介で処女作「漂流児」を雑誌『新小説』9月号に発表。このとき逍遙から「未明」という号をもらいます。翌年3月同誌に発表した「霧に裏」が好評を得、作家としての地位を確立し



ました。また、明治39年6月、前年に大学を卒業した未明は早稲田文学社に入社し、島村抱月の指導で雑誌『少年文庫』の編集を行います。この雑誌は1号で終刊しましたが、未明が児童文学に携わった最初となりました。

処女作からわずか1年で第一短編集『愁人』を上梓し、その後も小説の単行書を出し続けます。この頃は、自然主義といわれる、真実をありのまま描き、あらゆる美化を否定する文学が文壇を風靡していました。未明は己の作風を守り、新浪漫主義の作家と目されました。生活費を得るため、読売新聞社社会部の夜勤記者になったり、雑誌『秀才文壇』の編集者になったりしましたが、明治42年にすべての勤めを辞め、文筆で立つことを決意しました。明治45年には唯一の長編小説である「魯鈍な猫」を読売新聞に連載。同年、『早稲田文学』誌上で谷崎潤一郎、徳田秋声とともに名誉ある「推讃の辞」を受けました。また、小説を意欲的に書き続けるなか、第一童話集『おとぎばなし集 赤い船』を出版。これは日本最初の創作童話集といわれています。

一方、勤めを辞めた一家の生活は苦しむものでした。大正3年7月、疫痢のため長男を6歳で亡くし、長女もまた病床にありました。貧しさのため愛児を亡くした未明は、社会的弱者への思いを強め、しだいにそれが小説や随筆などの作品にも強くあらわれるようになっていきます。また同時に、社会的弱者である子どもへの関心が高まっていく中で、童話の世界にもより踏み込んでいくことになりました。



\*左から 未明、長女晴代、長男哲文、妻キチ

### III 「星の世界」へ

大正7年12月に出版された第二童話集『星の世界から』には、「病床にある長女晴代子のために」と記されています。長女は前月11月に結核で亡くなりましたが、未明の童話創作活動は、長男の死去、この長女の病氣以降活発になっていきました。未明にとって童話とは、永遠に対する憧れと、若やかな美とを表現する場であると同時に、つらい現実生活の慰めを求める場でもあったのです。

同年に鈴木三重吉が創刊した童話雑誌『赤い鳥』。「世間の小さな人たちのために、芸術として真価ある純麗な童話と童謡を創作することを目指したこの雑誌に、未明も多くの作品を発表します。『赤い鳥』に触発され、『金の船』、『童話』などその後児童雑誌の創刊が相次ぎましたが、これらの多くにも童話を発表し、未明自身も大正8年に創刊され

た『おとぎの世界』の監修をつとめました。そして大正10年2月、代表作のひとつ「赤い蠟燭と人魚」を東京朝日新聞に連載します。この時期には「牛女」、「金の輪」、「月夜と眼鏡」など、今日まで愛され続けている童話を多数生みだしました。

その後も小説と童話、双方を創作していた未明でしたが、大正15年5月、『小川未明選集』全6巻の完成を機に、「今後を童話作家に」を東京日日新聞(現毎日新聞)に発表。小説の筆を折り、今後は童話に専心することを宣言しました。

こうして誕生した「童話作家小川未明」は、多くの童話を発表しつづけ、児童文学界の中心的存在となつていきます。その作風は、大正期にみられた幻想的な物語から、しだいに子どもの生活をえがくものへと変化していきました。



\*『給チョコの天使』  
アイデア書院 大正13年3月



\*『赤い蠟燭と人魚』  
天佑社 大正10年5月

### IV 永遠の童心

児童文学界の重鎮としての長い作家生活のうちには、未明童話に魅せられて児童文学の道を志し、未明に師事した作家たちとの交流も多くありました。彼らは、未明の作品だけでなく人柄にも尊敬をはらい、年齢を超えて親しく付き合いました。

昭和21年3月、「自由で芸術的な民主主義的児童文学」の創造を旗印に、児童文学者協会(現日本児童文学者協会)が結成されました。未明もこれに参加し、昭和24年64歳のとき、初代会長に選出されました。未明は『児童文学新聞』で、「児童こそ私たちの希望である。その児童のための文学が、まだ一般の小説並に取扱われていない無理解に対してたたかわなければならぬ」と、会長を引き受けた理由について語っています。



「友情」自筆原稿  
『お話の木』第1巻第7号掲載  
昭和12年5月



昭和26年4月、前年から刊行が開始されていた講談社の『小川未明童話全集』の出版記念会が開かれ、未明を慕う多くの児童文学者が出席しました。同年5月に芸術院賞を受賞、昭和28年11月には永井荷風、川端康成とともに芸術院会員に推され、文化功労者に選ばれましたが、その後も創作の源は尽きることなく、昭和33年頃まで童話を書きつづけました。

昭和36年5月11日、未明は東京高円寺の自宅で79歳の生涯を閉じます。葬儀には、坪田譲治や同郷の芥川賞作家小田巖夫をはじめ多くの文学者が参列し、未明の児童文学界への功績に対し勲三等旭日中綬章が授与されました。また、6月20日に開かれた母校早稲田大学大隈記念講堂での「小川未明追悼文学講演会」では、佐藤春夫、尾崎士郎ら五人が講演し、未明の思い出や業績を語りました。



\*芸術院賞受賞当日 昭和26年5月  
前列左から坪田譲治、未明、秋田雨雀  
後列左から吉田甲子太郎、浜田広介

### ◆未明の東京生活

未明は上京して以来、母校早稲田大学の周辺で転居を繰り返しました。在学中は4年間で33回下宿先を変えたと言われ、結婚後もひとつとところには長くは留まりませんでした。そんな未明も48歳のとき高円寺に家を持ち、亡くなるまでをそこで過ごしました。高円寺の自宅書斎の様子、よく飲みに出かけた新宿で未明が収集した飲食店のマッチから、未明の東京での生活を少しのぞいてみました。



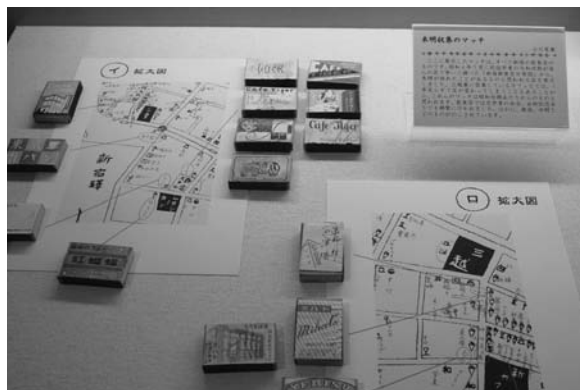
\*書斎での未明



先生は、初夏の宵が好きだった。あかるいうちに新宿へ出て、樽平で、湯どうふ、なまあじ、すずめの焼鳥などで、いっぱいやり、それから、当時角筈にあった植木屋の中を見てまわるのが、大体のコースだった。先生は二十四、五貫の巨大漢で、小男の私の二倍もあった。先生が、新宿の雑沓を歩いていくと、人波は向こうから自然に割れて、先生のあとに従う私は、らくらくと歩けた。

未明の趣味追想  
「酒と文学と人生」

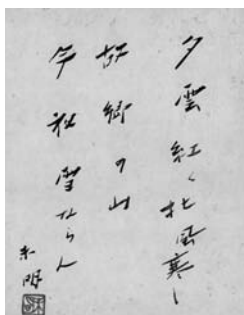
奈街三郎著より抜粋



未明収集のマッチ

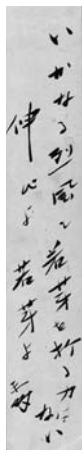
### ◆ふるさとの父母へ

上京以後、戦時中も疎開することなく、ふたたびふるさとに住むことのなかった未明でしたが、残してきた父母のことを常に気にかけていました。長い休みには子どもたちを帰省させ、自らもたびたび春日山を訪れています。父母や義弟に宛てた数々の手紙や、東京からふるさとを思つて詠んだ詩が、未明の父母への思いを物語っています。



### ◆子どもたちへのメッセージ

未明は、次代を担う子どもたちこそ、真の芸術が必要だと考えていました。そのため、子どもの代弁者となり主張し、同時に子どもを慰める存在である童話を書く道を選んだのです。童話は子どもを愛し、子どもの生活を知らなければ書けないと言い、つねに子どもたちにあたたかい視線を注いでいました。



\*印の写真提供：小川家

# 小川未明文学賞

小川未明文学賞は、日本児童文学の父といわれる上越市出身の小川未明の文学精神「人間愛と正義感」を次代に継承するため、平成4年に創設されました。子どもたちの心に夢と希望を育むような鮮烈な児童文学作品を募集しています。

平成23年度で20回目を迎え、これまでに延べ9200編を越える作品が国内外から寄せられました。

大賞作品は単行本で刊行され、多くの子どもたちに読まれています。



小川未明文学賞贈呈式

## 第21回募集要項

### ◆募集作品

- ・小学3～6年生を読者対象とした創作児童文学で、内容・形式は自由。
- ・400字詰め原稿用紙で50枚～120枚
- ・未発表作品に限ります。
- \*詳細は左記にお問い合わせください。

### ◆応募資格

年齢、プロ・アマを問いません。

### ◆応募方法

上越市文化振興課へ郵送または持参してください。

### ◆締切

平成24年10月31日(水)(当日消印有効)

### ◆入選作

- ・大賞1作(ブロンズ像・賞金100万円・副賞)
- ・優秀賞2作(賞金20万円・副賞)

### ◆発表

大賞・優秀賞の受賞者は、平成25年3月上旬に本人に直接通知します。

### 応募・問合せ

〒943-0832 新潟県上越市本町3-3-2  
 上越市文化振興課  
 「小川未明文学賞担当」  
 TEL 095-1526-6903  
 FAX 095-1526-6904  
 Email: mimei@city.joetsu.niigata.jp

### \*受賞のひとこと\*

小川未明の作品で最初に読んだのは、国語の教科書に載っていた「殿様の茶わん」でした。その後、学校の図書館で未明の童話集を借り、「赤いろうそくと人魚」や「野ばら」を読み、理不尽な争いや不条理が人間の心にもたらす深い悲しみを知り、心を動かされたのを覚えていてます。秋田県に生まれ育ちましたので、本を読む窓の外には、上越の冬の風景と同じような、こんもりした真っ白い雪が深く積もっていました。

大人になって自分が物語を書くことなど想像もしませんでした。今思えば、夢中で本を読んでいる夜は、夜ふかしも許してもらえ、そんな雰囲気の中で育ったことは幸せなことでした。

三十八歳の秋に病気を患ったのをきっかけに、創作を始めました。

書ける時期も書けない時期もありましたが、書くということは、自分という人間に欠けている何かを追い求めるような作業だというように思えます。

受賞した作品「パンプキン・ロード」は、八ヶ岳山麓が舞台になっています。おおらかな自然や新しい出会いの中で、母親を亡くした少女が、悲しみから心を回復させていく物語です。

震災で親や家族を亡くした子どもたちが、苦しい現実を受け入れて生きなくてはならない今、いったい何が傷ついた心を癒すのだろう。被災地で震災を経験したとはいえ、大きな傷を負ったわけでもない私がこのような作品を書くことは、もしかしたらとても傲慢なことではないのか。そんな迷いもありましたが、それでもやはり書くことと思立ち、気がついたら夢中で文章を綴っている自分がありました。

贈呈式の翌日、春日山神社と神社記念館を案内いただきました。数々の貴重な資料を拝見し、小川未明の生い立ちや文学活動の軌跡に触れ、あらためて、未明の名を冠した賞を授かったということの重みを実感しました。未熟な私には大きすぎる光栄と思いますが、選考にあたってくださった先生方、上越市の方々、文学賞委員会や関係者の皆様に、心から感謝しております。本当に、ありがとうございます。

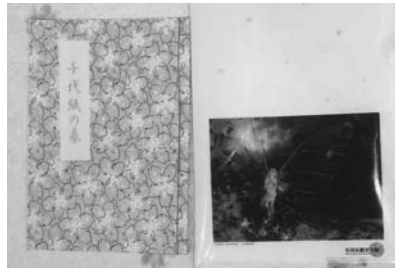
これからも、未明文学の神髄であるヒューマニティーをテーマに、作品を書いていけたらと思っています。



第20回小川未明文学賞大賞受賞 もり いずみ  
 (大賞作品「パンプキン・ロード」)

## 平成23年度の活動

- ・ 上越ケーブルビジョンでの朗読公開講座出演
- ・ 大潟区での大潟水と森公園ミニコンサート朗読出演
- ・ 県立近代美術館でのいわさきちひろ展朗読会出演
- ・ 上越市内小学6年生全員への朗読鑑賞会出演(上越文化会館)
- ・ 小川未明文学館ビッグブックシアターおはなし会(毎月第2・第4日曜日、午後2時～)延べ参加者271名
- ・ 出張おはなし会(小・中学校、放課後児童クラブ、幼稚園、福祉施設等)39ヶ所、1627名
- ・ 特別展朗読会
- ・ 会員の研修会



## スタンプ10個集まりました

今年度は2名の方にプレゼントが出来ました。村山陽さん挿絵のオリジナル絵本「千代紙の春」か「月夜と眼鏡」のクリアファイルです。

清水和子さん・稲田みどりさん

## ■水と森のコンサート



新潟県立大潟水と森公園ふんすい広場において、伝説「人魚塚」にちなみ小川未明作「赤い蠟燭と人魚」を朗読と音楽で楽しんでいただきました。(未明童話の会)

## ■朗読鑑賞会



上越市内の小学6年生を迎え、映像、音楽、朗読による「小川未明の心の世界」を体験。未明没後50年を機に、地元朗読団体から公募。未明ボランティアネットワークから「グループ空」が参加。「二度と通らない旅人」をオリジナル映像と音楽を使ってわかりやすく朗読しました。

(感想) この作品の持っている、自然の色合いや人間の迷いや後悔の気持が理解しやすいように、映像を工夫しました。場面転換や、心の動きにつれて、それにふさわしい音楽を入れることにより、聞く人の心に感動をお届け出来たと思います。

## ■県立近代美術館「いわさきちひろ展—子どものしあわせを願って—」



朗読「赤い蠟燭と人魚」  
(未明童話の会)

(感想) いわさきちひろ展に合わせ「赤い蠟燭と人魚」「おやゆびひめ」、小川未明作「月夜と眼鏡」をオリジナル音楽を使い朗読しました。初めての、長岡市まで出張の朗読会。8名出演と会員参加で、苦勞もありましたが楽しい一日でした。



「おやゆびひめ」(せせらぎの会)

出張おはなし会、会員加入の連絡先  
上越市文化振興課

〒943-0832  
上越市本町3-3-2  
TEL 025-1522616  
025-1522616  
FAX 025-1522616  
025-1522616  
E-mail: nimeic@city.joetsu.lg.jp



# のばら

未明ボランティアネットワークだより

## vol.8

発行：未明ボランティアネットワーク  
発行日：2012年5月31日



### グループ紹介



#### せせらぎの会

未明作品を、わかりやすく、イメージしやすく出来るように、絵を付けたり紙芝居にして読み語っています。



#### お話の会うさぎ

6月にデビューしたばかりの、よちよち歩きですが、先輩から教えていただきながらがんばります。



#### グループ空

小さなお友達のために、未明さんのお話を楽しく聞いてもらえるように、パネルシアター、ペープサート映像等で工夫しています。



#### 未明童話の会

未明文学館は、子供から大人まで作品を楽しむ場と考えて、和やかに楽しく読んでいます。

### 出張おはなし会



#### ふれあいの里・名立

(感想) ボランティアの皆様による「小川未明」の作品を中心に朗読や紙芝居、歌を唄いながらの体操など楽しい時間を過ごす事が出来ました。



#### 黒田小学校放課後クラブ

(感想)  
初めて未明の本が読めてうれしかった。特に「まごころの届いた話」がやさしい話だなーと思った。(U. S)  
印象に残ったのが「赤い船」です。女の子が外国へ行きたいという夢の所です。



#### 富岡小学校

(感想) 「赤い船」の話がおもしろかった。女の子が外国へ行きたいという夢が印象的でした。

### 特別展朗読会

「赤い船」 未明童話の会

「島の暮れ方の話」 グループ空

「どこかに生きながら」 せせらぎの会

「子うさぎとははうさぎ」 お話の会うさぎ

## ● お知らせ ●

### 小川未明関係資料の収集について ご協力をお願い

小川未明文学館では、未明に関する文学資料の収集に努めています。下記の資料に関する情報をお持ちの方は、ご連絡くださいますようお願いいたします。資料の寄贈については、特定の場合（すでに複数点を所蔵している資料等）を除きお受けしますので、ご不明の点はお問合せいただくと幸いです。

#### 【主な収集資料】

##### 1. 特別資料

小川未明原稿、書簡、遺品、その他自筆資料（短冊・書軸等）、写真（オリジナル）、小川未明関係者資料（未明書簡、献本など）

##### 2. 図書

未明作品集（未明生前・没後刊行図書）、全集・選集（未明作品を一部所収した資料も含む）、初出雑誌（未明作品掲載）、未明作品の外国語訳、絵本・紙芝居

##### 3. 参考資料

未明に関する研究論文、エッセイ、記事（雑誌・新聞等）

## 平成24年度 小川未明文学館カレンダー

朗読研修会 講師：橋 由貴さん

3月30日・4月20日・5月25日

10月 特別展 未明童話絵本原画展（仮）

10月6日（土）～11月11日（日）

\*記念講演会、各種イベントを開催

文学館講座3回

小川未明文学賞締切 31日（水）

11月 童話創作講座

10～12月 謙信 KIDS スクールプロジェクト「童話の楽校」

\* 特別展の他に、随時小企画展を開催。

未明ボランティアネットワークによるおはなし会

\* 毎月第2・4日曜日午後2時から文学館にて開催

\* 学校等での出張おはなし会を随時開催

## 未明生誕130年記念関連イベント

### ◆上越文化会館創造事業

・小川未明・愛の世界 ―光と闇の織りなす物語―

4月30日（月・祝）

・小川未明・愛の世界 ―未明と子どもたち―

11月4日（日）

### ◆感想文コンクール「野ばら賞」

## 小川未明文学館のご利用案内

### 開館時間

火・金曜日 午前10時から午後7時  
（6月から9月の間は午後8時まで）  
土・日・休日 午前10時から午後6時

### 休館日

毎週月曜日（この日が休日の場合はその翌日）  
休日の翌日・館内整理日・資料整理期間  
年末年始（12/29～1/3）

### 入館料 無料



### 問合せ

〒943-0835

新潟県上越市本城町8-30（高田図書館内）

TEL 025-523-1083

FAX 025-523-1086

URL <http://www.city.joetsu.niigata.jp/site/mimeibungakukan/>